

ルキノ・ヴィスコンティ監督作品

ルードウィヒ

たそかれ

神々の黄昏

芸術と美に殉じた
高貴な精神に捧げる
華麗なるオマージュ。
魂を揺るがす
巨匠の最高傑作。

「私は謎なのだ
永遠に謎でありたい
他人にも私自身にも」

ヘルムート・バーガー
ロミー・シュナイダー
シルヴァーナ・マンガノ
トレヴァー・ソワード
ゲルト・フレーベ
ウンベルト・オルシーニ
ソニア・ペトロヴァ
ジョン・モルダー
ブラウン
マルク・ホレル

昭和55年度芸術祭参加作品



原案・脚本

ルキノ・ヴィスコンティ

エンリコ・メディオーリ

スーパ・チェッキ・ダミコ

撮影

アルマン・ナンヌツィ

音楽

リヒャルト・ワグナー

ロベルト・シューマン

ジャック・オッフエンバック

音楽指揮フランコ・マンニョ

演奏サン・チェチリア

国立音楽院管弦楽団

製作

イタリア・メガ・フィルム

西ドイツ・ディーター・ガイスター・プロダクション

ドイツ・フィルム・フランス・シネテル合作

Ludwig



ハナビジョン
カラー作品
東宝東和提供



昭和55年度
芸術祭参加作品

ルキノ・ヴィスコンティ
監督作品

ルードウィヒ

LUDWIG

神々の黄昏

たそがれ

イタリア・西ドイツ合作
カラー作品・パナビジョン
東宝東和提供



●すでに「地獄に堕ちた勇者ども」(69)「ベニスに死す」(71)で、ドイツ・ロマンチズムの末路を追ったヴィスコンティは、72年、この「ルードウィヒ」によって、その根源へのアプローチを果たしたのである。すなわち、人間を絶望の極みへと追いやってしまう頹廃と、耽美とを生み出す根源へのアプローチを。

●撮影にはルードウィヒが、自らのロマンを実現すべく建てた三つの城、リンダーホーフ、ノイシュヴァンシュタイン、ヘレンキムゼーをはじめ、ドイツ、オーストリアの、国王ゆかりの場所が、そのまま使用された。ディテールの一つとして疎かにはしない、ヴィスコンティ一流の美的リアリズムが、そこに場を得て開花する。華麗にして豪華この上ない背景の中で、ルードウィヒ(ヘルムート・バーガー)を中



●一九世紀半ば、父王のあとを継いで、一九才でバイエルンの国王となりながら、やがて「精神錯乱」を理由に王座を追われ、謎の死を遂げたルードウィヒ二世——。わが国でもかつて森鷗外が、小説「うたかたの記」で、この国王の死を題材にしているが、政治よりも詩を愛し、社交よりも真夜中の彷徨を好んだ孤独な王の、短かくも象徴的な生涯を、様々なエピソードを重ね合わせて描きだしたのが、この「ルードウィヒ」である。

ワグナーに心酔し、ドイツ神話の英雄たちに理想を求めたルードウィヒは、ドイツ・ロマンチズムの申し子であり、近代への歩みがはじまっていた当時のヨーロッパ史の流れからみれば、そうしたロマンの「黄昏」を象徴する人物像であった。

これはルキノ・ヴィスコンティの全作品に貫かれている(苦悩)(歓喜)(悦楽)(耽美)(敗北)(純愛)そのすべてを、美の陶醉ともいえる華麗なる時代色をもつて描き切った(ヴィスコンティ芸術)その秘密の鍵を知る彼の鮮やかなる告白であった。

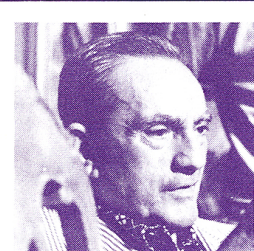
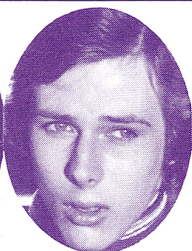
淀川 長治氏評

美と頹廃の運命を見つめていたヴィスコンティ監督にとって、狂王ルードウィヒの主題は必然的であったにちがいない。雪のなかの城、月光を浴びた馬車、洞窟のなかの白鳥……これらを描かなければ、ヴィスコンティとしては死んでも死にきれなかったのだと思う。

洪澤 龍彦氏評

心に、彼が秘かに慕う従姉エリザベート(ロミー・シュナイダー)国王の惜しみない援助をうけるワグナー(トレヴァー・ハワード)フランツ・リストの娘で、ワグナー夫人となったコジマ(シルヴァーナ・マンガノ)等が、優れた絵画の中の人物のように息づく。その息づかいに、ワグナーの名曲の数々が、調べを与える(トスカニーニが発見した、未完のピアノ曲もこの映画で初めて公表される)。そして、永遠の謎でありたいという、ルードウィヒの願いを、ヴィスコンティは、重い共感とともに見つめ続ける。

●欧米では2時間23分の短縮版上映が多かったが、「幻の名作・ヴィスコンティの最高作」として長らく待望されたわが国の公開には、3時間4分のオリジナル版が使用される。



ヴィスコンティ監督「ルードウィヒ」を語る

「私は絶えず際立った人物に惹かれてきた。そして、私は常にドイツの歴史と文化に特別な関心を抱きつづけてきた。従って、ワグナーの賛美者、ビスマルクの支持者になり、最後には臣下に侮られ、全く孤独で、精神異状を宣告された若く強健で、途方なく美しいばかりの王、バイエルンのルードウィヒ二世を私が選んだのは、全く必然的なことだった。私の考えでは、ヘルムート・バーガー以上にこの役を理解して演じられる者は誰もいないだろう」

【スタッフ】
監督…………ルキノ・ヴィスコンティ
原案…………ルキノ・ヴィスコンティ
脚本…………エンリコ・メディオーリ
…………スーゾ・チェッキ・ダミーコ
撮影…………アルマンド・ナンヌツィ
…………リヒアルト・ワグナー
音楽…………ロベルト・シューマン
…………ジャック・オッフエンバック
ピアノ独奏…………フランコ・マンニーノ
演奏指揮…………サンタ・チェチリア国立音楽院管弦楽団

【キャスト】
ルードウィヒ…………ヘルムート・バーガー
エリザベート…………ロミー・シュナイダー
リヒアルト・ワグナー…………トレヴァー・ハワード
コジマ・フォン・ビュロー…………シルヴァーナ・マンガノ
ホフマン神父…………ゲルト・フレーベ
デュルクハイム大佐…………ヘルムート・グリーム
皇太后…………イザベラ・テレジンスカ
ホルンシュタイン伯爵…………ウンベルト・オルシーニ
オットー殿下…………ジョン・モルダー・ブラウン
ソフィー…………ソニア・ペトロヴァ
リヒアルト・ホルニヒ…………マルク・ボレル